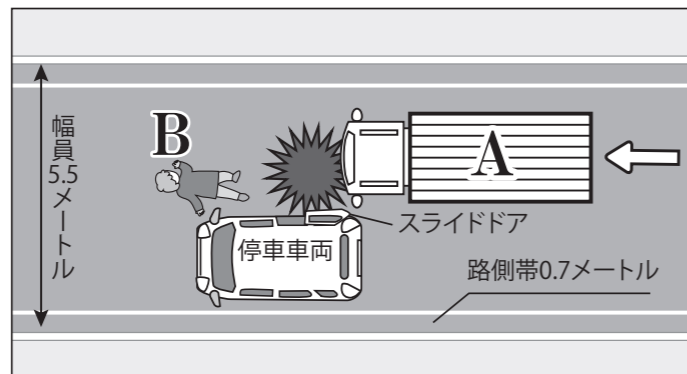


職場における交通安全指導

Part 113

I 停車車両から降車した歩行者に衝突



■事故の概要

●事故の当事者

当事者A：運転者（中型貨物車）40歳代 男性
当事者B：被害者（歩行者）70歳代 女性

●被害状況

A：左前照灯付近擦過傷及び凹損
B：重傷
（右肩・右肘部打撲、左側頭部頭蓋骨骨折）

●道路状況

住宅街、中央線のない生活道路

事故状況

横浜市内にある食料品関係を輸送する運送会社に勤務するAは、中型トラックの乗務経験は10年のキャリアがあり、配送業務にも十分に慣れているドライバーである。この日は、会社から東京都内と埼玉方面に配送する予定であった。

出発前、運行管理者から配送先現場等について、一般的注意事項やその他の指導を受けて運行前点

検を実施後、配送先へ出発した。

首都高速を利用し都内に入り、一つ目の配送を終了させ、その後埼玉の配送先付近で住宅街の狭い生活道路を走行していた。

事故現場となった場所は、歩車道区分の無い幅員5.5mの狭い道路であり、両側に路側帯の設置された生活道路のため、Aは速度を30km/h以下に減速し走行していた。Aの前車はバン型の普通車で、追従走行していたがハザードを点けて左側に寄りながら減速したので停車するものと予測した。Aはほぼ中央寄りを走行していたが、停車する前車を追い抜くため、右側寄りに進路変更して通り抜けようとしたところ、前車の右側スライドドアが開き、いきなり高齢の女性Bが降りてきた。

Aは、「停車車両からいきなり人が出てくる」とは予測していなかったため、発見時にあわてて急ブレーキを踏んだが間に合わず、Bに衝突、路上に転倒させ重傷を負わせた。

Aは、トラックを停めてBのところに駆けつけ、すぐに救急車を呼んだ。

Bは搬送された病院で、左側頭部の頭蓋骨骨折と右肩・右肘打撲の重傷と診断された。

事故の原因

当日は、配送先が東京・埼玉と近く、運転者の心理的要因としては、約100km走行なので時間的にも場所的にも余裕があった。また、事故現場の道路の流れもよく、緊張感の無い油断した状態で走行しており、「まさか停車した車からすぐに人が降りてくる」などとは全く思いもせず、「かもしれない予測」をしていなかった。

Aは事故後、その時の状況について、「たとえば、前車がデイサービスの車であり、高齢者が乗車していることは容易に予測できたので、停車したら高齢者が降車することを予測し、速度を減速して「かもしれない運転」をしていれば、Bの発見と同時に停止でき、この衝突事故を防ぐことができた」と振り返った。

安全指導

交差点での事故及び生活道路での横断歩道以外の横断事故や、駐車車両の陰からの飛び出し事故など、発生場所別に見た特徴や注意すべき点についてまとめました。

① 「右・左折時事故」の歩行者等を警戒

交差点右・左折時の事故の中で、対歩行者事故は、直接衝突すると傷害の程度が大きくなることを理解しておきましょう。また、「横断歩道上は、歩行者の絶対的聖地」という認識を持って、特に横断歩道上への目配りを強くして、駆け込み横断者に警戒する必要があります。

② 生活道路での歩行者の動きに注意

住宅街の生活道路では、歩行者が横断歩道外を横断している光景をよく見かけますが、通行車両が少ないことから、歩行者が道路上においても自宅庭先と同様と考えていることがあり、周囲を確認せずにいつでもどこでも急な横断・飛び出しをするという危険があります。

③ 駐停車車両の陰の歩行者を確認

商店街や生活道路など駐停車車両が多い場所を通行する場合には、その陰には歩行者がいることを予測して、徐行するなどの注意をしながら通行することにより、車の陰からの横断・飛び出しのほか、今回の事故のように、駐車車両からの降車した歩行者との衝突を防止することができます。

④ 夜間は上向きライトで歩行者の早期発見

街路灯が少なく、うす暗い生活道路では、夜間の走行時に下向きライトでは、照射範囲が狭いので歩行者の発見が遅くなり、間に合わないことが多いため夜間走行の基本である上向きライトで走行し、歩行者を早期に発見する必要があります。上向き、下向きの切替が面倒になりがちですが、普段から積極的に上向きライトを活用しましょう。

ドキッとする前に「かもしれない運転」の励行

